

# 古筆切拾塵抄・続(十二)

— 入札目録の写真から —

小島 孝之

## はじめに

今回は若干時代をやや後にする昭和七年十月十八日の入札目録『天竺家愛蔵品入札並売立目録』を取り上げる。タイトルの「入札並売立」と銘打つ目録は、名古屋美術倶楽部で行われた入札に特徴的なもので、前半に入札に供される品物の写真が番号を振って並べられ、後半に番号なしで売立品の写真が並べられる。ただし、前半の入札品は一ページに一点の全体を写した写真が掲載される。古筆切で言えば、掛け軸全体を写した写真と古筆切の部分をアップに写した写真とが並置される場合が多いのだが、売立品になると、一ページに二

点乃至数点の小さい写真が掲載され、アップの写真はない。本目録も例に漏れず、そういう定型通りに作られているので、売立品の写真は小さく、鮮明さに欠けるのは如何ともしがたい。おそらくそのような事情から、『古筆学大成』は本目録から資料の採集を行っているのだが、売立品の部分については写真を転載せず、釈文のみを掲げるにとどめている。妥当な措置であると思うが、不鮮明なりにその書写の様態を観察することには、それはそれで意味がないわけでもないと考えるので、ここに取り上げておくことにしたいのである。

入札品の部はすべて『古筆学大成』に鮮明な写真が掲載されているので、その概略のみを指摘しておくだけにしよう。

## 一 入札品の部

番号は、目録に記された番号をそのまま使用するので、番号が飛ぶ箇所もあることをお断りしておく。

一 佐竹侯爵伝来 信実 三十六歌仙 猿丸太夫 詞書後京極良経卿

言わずと知れた「佐竹本三十六歌仙」である。(なお、標題に記された表具の説明は割愛した。)これが、この入札会の目玉なのであろう。「佐竹本三十六歌仙」は令和元年の京都国立博物館の秋の特別展で全てが公開される(僅かに例外はあるが)という久々の大公開だったので直接目に触れた方もおられるであろう。

三 俊忠 伊丹切 巻頭 はのかを

いわゆる「二十巻本歌合」の内の『左京大夫道雅西八条家障子絵歌合(左京大夫八条山莊障子和歌合とも)』と『寛平御時后宮歌合』とを写した巻物が兵庫県伊丹の小西家に所蔵されていた。これを昭和三年に分割した際に、「伊丹切」と命名されたという。本断簡はその内の『寛平御時后宮歌合』

の冒頭部分である。元の卷子本には巻末に、弘化三年の大倉好斎による鑑定識語が付されており、「寛平御時后宮歌合」の部分は藤原俊忠の筆跡と鑑定されていたという(春名好重『古筆大辞典』による)。分割されたために現在はその所在不明になっている部分もあるようで、『古筆学大成』はこの天整家の入札目録の写真を転載している。

四 顕輔卿 鶉切 みな人は

『古今集』巻十六(847番—848番)で、鶉と下草の下絵が見られる。『古筆学大成』には「個人蔵」として原寸大の鮮明な写真が掲載されている。伝称筆者は院政期の藤原顕輔に擬されているが、実際はもつと時代が下る鎌倉後期の写本であることが判明している(『古筆学大成』の解説が指摘)。なお、当該断簡は、天野家以前に、昭和三年六月四日の『瓢々庵氏所蔵品入札』に出ており、この後、昭和十一年一月十六日の『柴山青松軒並某家所蔵品売立』にも出品されている。

五 本願寺伝来 西行 仮名文

流麗な仮名の散らし書きの書状であり、署名等筆者を特定する手掛かりはない。西行の真筆の書状と比べれば、到底西

行の筆跡ではありえないのだが、古筆見による鑑定では、往々にしてこうした仮名の散らし書きの書状を西行筆と極めている場合が多いように見受けられる。「本願寺伝来」とあるから、それ相当地に珍重されてきたのであろう。「竪八寸九分 巾一尺八寸三分」と付記されている。(図1)。

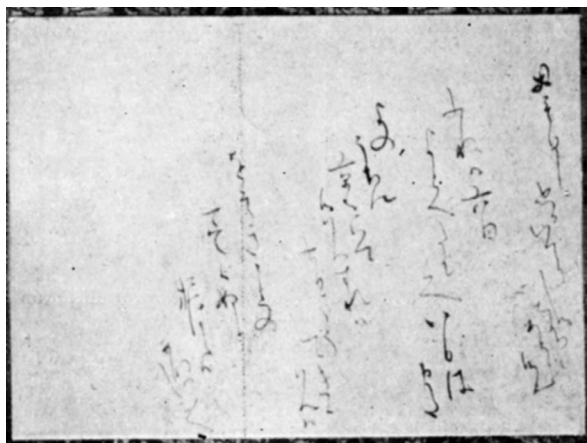


図1

読めない箇所も多いが、試みに読んでおく。

おもひし二

思ひいて、しる

はかり

そ□□

ふねハ六日

けん

よとへたに

候へ 八日は

よの □かた

うちに

京をいて

候はんすれハ

七日□□う

てき、

をそきことの はんハ

てて□ぬ□□

おほし候

あれハ

し□く

女性の消息かとも思われるが、京を出て西国へ旅に出る途中に京へ書き送った書状であろうか。前半が欠けているように思われる。

## 六 定家卿 龍形切

三輪山

伝定家筆の『拾遺愚草』の断簡である。定家様の筆跡ではあるが、定家真筆ではありえない。『古筆学大成』は当該断簡を昭和四年六月十日の『尾州佐野弥高亭所蔵品入札目録』から転載して、十三世紀後半の書写と推定しているが、妥当な想定であろう。『古筆学大成』で小松茂美氏は「竜の丸紋をあらわした唐紙」と述べており、春名好重『古筆大辞典』は「料紙に龍の文様がある」と記している。小松氏は「確認したのは、この一葉のみ。」としているが、その後数点のツレが見出されている。その内の一つ、久曾神昇氏旧蔵の古筆切を紹介した『歌びと達の競演』に一点がありその解説中に、日比野浩信氏はツレを関西大学所蔵の二面分一幅があるとした上で、「関西大学所蔵切には、料紙に丸龍紋が刷り出されている。」と述べている。その他に管件に入ったものでは、平成七年の『柏林杜古書目録』掲載断簡に、「龍文雲母摺料紙」と付記されている。以上のような状況から「龍形切」の

命名の由来は明瞭であろう。ただし、久曾神氏旧蔵品には文様が見えないなど、文様のない部分もあるということなのであろう。その他に気づいたツレを列挙しておくと、大正十二年四月二十九日の『耕雲庵糟谷半醒子所蔵売立』所載の1902の十行（『古筆切資料集成 三』に翻刻あり）、昭和三年十一月『第二回総合美術名品展』所載の1917の十二行（十行と二行を貼り合わせてある）、平成十七年一月の『中尾松泉堂古典目録』所載の1933の1935/1899の十九行（九行と十行を貼り合わせてある）、古書店「玄海楼」のホームページに掲載されていた1816の1818の六行があり、すべて合わせると九葉が確認されることになるようである。またこれから見て、元の冊子は一ページに十行が書写されていたと見てよいであろう。

## 二 古筆手鑑『藻塩草』

### 三五 古筆手鑑 藻塩草

国宝の『藻塩草』（京都国立博物館所蔵）とは異なる同名の古筆手鑑である。十六葉の古筆切の鮮明な写真が掲載されている。すべてが名物切であり、その質の高さは目を見張る

ものがある。ここに収録された切はすべて『古筆学大成』に収載されているので、簡略に要点のみ記しておく。(図2)



図2

断簡もその一つとされている。『古筆学大成』には「個人蔵」として掲載されている。

### 3 基俊 多賀切

藤原基俊真筆の『和漢朗詠集』の断簡。「紅梅」(96～100番)の八行。現在の所在は不明だが、『瑞穂帖』や『三十回手鑑』に複製されている。

### 4 俊成 日野切

藤原俊成真筆の『千載集』の断簡。撰者自筆本として極めて意義のある写本。卷十六(963～964番)の十行。『古筆学大成』には「個人蔵」として写真が掲載されている。

### 5 佐理 紙撚切

伝藤原佐理筆『道済集』(232～233番)の六行の断簡。『古筆学大成』には「個人蔵」として写真が掲載されている。

### 6 小大君 香紙切

散逸歌集『麗花集』の断簡十行。卷十の一部か。『古筆学大成』には同じく「個人蔵」として写真が掲載されている。

### 1 道風 本阿弥切

『古今集』卷十八(971～972番)の八行。現在はサンリツ服部美術館の所蔵。

### 2 源順 梅尾切

『万葉集』卷八(1430～1432番)の八行。卷七・八には梅尾切を模したと看做される鎌倉時代写の「梅尾類切」があり、本

書芸文化院の複製『香紙切』にも収録されている。

# 7 西行 歌合切

伝西行筆の「月輪切」で、『宮河歌合』（35～36番）の十行。昭和五十三年六月の「第八回茶会の会」目録に出ているから、現存していると思われるが、『古筆学大成』は『三十回手鑑』の写真を転載している。

# 8 宗尊親王 元暦万葉切

元暦元年（一一八四）の校合奥書があることから「元暦校本万葉集」と呼ばれている。『万葉集』巻七（1085～1086番）の断簡である。巻四はかつて有栖川宮家に伝えられていたので「有栖川切」と称され、巻十四の断簡はかつて大阪にあったので「難波切」と称される。筆者も巻ごとにさまざまに鑑定されているが、巻四や巻二十の筆者として宗尊親王の名が擬されるが、実際の書写はもっと古く、平安時代に遡る。『古筆学大成』は複製手鑑の『瑞穂帖』の図版を転載している。旧版の『書道全集』では、天野三郎氏蔵藻塩草を出典と明記している。

# 9 行成 朗詠集切

藤原行成を伝称筆者に擬する『和漢朗詠集』（418～420番）の断簡。伝行成筆「雲紙和漢朗詠集」というと、現在宮内庁三の丸尚蔵館に保管される上下二巻の完本があるが、それとは別筆の伝行成筆の「雲紙和漢朗詠集」の断簡が存在する。本断簡はその一つ。『古筆学大成』には「個人蔵藻塩草」として大きな写真が掲載されている。

# 10 忠家 歌合切

「二十卷本歌合」の内の『山家三番歌合』（1～2番）の断簡。『古筆学大成』は「個人蔵」として大きな写真を掲載している。この歌合は実際にはもっと多くの筆者の分担書写なのだが、古筆見による鑑定は、藤原忠家筆「柏木切」と藤原俊忠筆「二条切」にはほぼ二分されている。筆者の擬定に何の根拠もないのだが、それに従えば、これは「柏木切」ということになる。

# 11 雅経 今城切

飛鳥井雅経を伝称筆者とする『古今集』巻十六（849～850番）の断簡。実際の筆者は藤原教長であることが明らかにさ

れている。『古筆学大成』には「個人蔵」として原寸大の写真が掲載されている。

## 12 頭輔 鶉切

『古今集』の卷十三（645～647番）の断簡。「鶉切」については前出。『古筆学大成』には「個人蔵藻塩草」として原寸大の写真が掲載されている。

## 13 俊忠 歌合切

「二十卷本歌合」の内の「元永二年内大臣忠通歌合」（47～48番）の断簡。10と同じことになるが、伝称筆者は藤原俊忠なので、これは「二条切」ということになる。『古筆学大成』は『瑞穂帖』の図版を転載している。

## 14 俊頼 丹地古今集切

『古今集』卷十三（1109～650～651番）の断簡。料紙の地色が朱なので、こう呼んだのであろうが、一般的には「卷子本古今集」と呼ばれているもののツレである。美麗な唐紙を繋いだ卷子本であり、大倉集古館蔵の仮名序一卷と平瀬家蔵の卷十三の零巻がまとまった形で残っている（ともに複製が存す

る）他はすべて断簡になっている。『古筆学大成』は複製手鑑の『夏かげ』の図版を転載している。

## 15 寂蓮 右衛門切

伝寂蓮筆の『古今集』卷一（68）の断簡。卷末なので左半分には3行分ほどの余白がある。これは現在、畠山記念館に所蔵されている。

## 16 為家 姫路切

藤原定家撰の『源氏物語』と『狭衣物語』との中の歌を番えた『物語百番歌合』（7番）の断簡である。美麗な料紙に筆写されている。『古筆学大成』は当目録の写真を転載している。

以上で『藻塩草』収録の古筆切の写真はすべてであるが、この手鑑のその後を考えると、一部の古筆切は手鑑から剥がされて売却されたものの、ある程度はそのまま残されて、某個人の所有に帰して現在に至っているのではなからうか。この他にどのような古筆切が収録されていたのだろうか。



### 三 売立品の部

前述したように、売立の部の写真は小さく、不鮮明なので確認しづらい所があるのだが、以下に写真と翻刻を試みる。順番を示す番号が振られていないので、掲載順に「標題」を掲げて記述する。

#### 道風 四半切 (89頁)

写真が不鮮明過ぎて殆ど読めない。辛うじて分かることは、詠者の名前が記されていないようなので私家集の切であるらしいこと、歌は一首二行書きらしいこと、詞書はかなり低く書かれているらしいこと等が印面から窺われるので、道風という伝称筆者名が正しいと仮定すると、「小島切」即ち『斎宮女御集』の断簡であろうか。『古筆学大成』も当然ながらこの断簡については一切ふれていない。一応写真を転載するが翻刻は不可能なので割愛する。(図3)

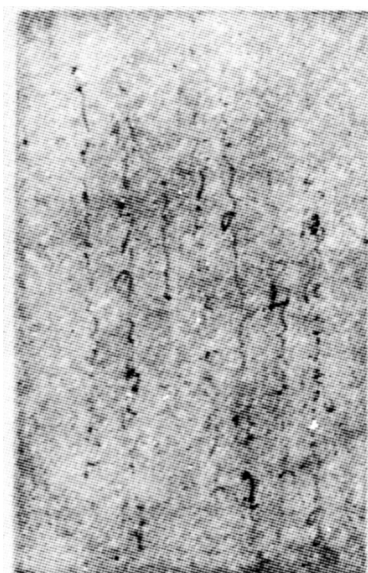


図3

#### 雅経卿 今城切 瀧の歌 (90頁)

標題の通りの「今城切」である。『古今集』卷十七(924番)の断簡である。『古筆学大成』は、この天竺家の目録ではなく、昭和三年六月四日の『瓢々庵氏所蔵品入札目録』所載の同一古筆切の写真を翻刻し、釈文のみを掲げて写真は載せていない。ここでも、瓢々庵の目録の写真の方を転載する。

#### 承均法師

たかためにひきてさらせるぬのなれや  
よをへてみれとゝるひともなき



## 神退法師

きよたきのせゝのしらいとくりためて

やまわけころもをりてきましを

龍門にまうてゝたきのもとにてよめる

なお、『古筆切資料集成 一』も翻刻を載せている。(図4)

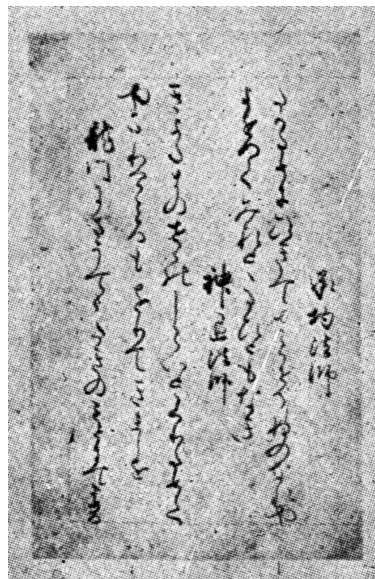


図4

俊成 御家切 よしの河 (91頁)

藤原俊成筆「御家切」の『古今集』巻十五(794~797番)の断簡である。『古筆学大成』はやはり釈文のみを載せる。『古

筆切資料集成 一』は、昭和四年五月二十九日の『山内飽霜軒所蔵品入札売立目録』の方の写真により翻刻を行っている。

みつね

よしのかハよしや人こそつらからめ

はやくいひてしことハわすれし

よみ人しらす

よのなかの人のころハはなそめの

うつろひやすきいろにそありける

ころこそうたてにくけれそめさらハ

うつろふこともおしからましや

こまち

いろみえてうつろふものハ世中の

人のころのはなにそありける

一応右のように読めるが、不鮮明で文字の一部のみが判読できたり、よく見えないがすかな残画から推測した部分は□で囲んだ。「山内飽霜軒」の目録は手元ないので確認できないがもつと鮮明な写真が載っているかもしれない。(図5)

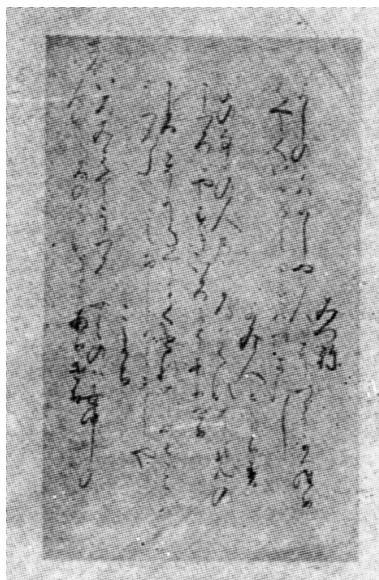


図5

寂蓮 右衛門切 秋を、きて

(91頁)

伝寂蓮筆の「右衛門切」『古今集』巻五(279番)の断簡である。それなりに読むことが出来る程度の写真の鮮明さは本断簡にはある。それでも、『古筆学大成』は釈文のみにとどめて写真は載せていない。『古筆切資料集成 一』はこれも翻刻を行っている。屋上屋を架すようだが、本稿でも左に本文の翻刻を記す。(図6)

にわしにきくのはなめし

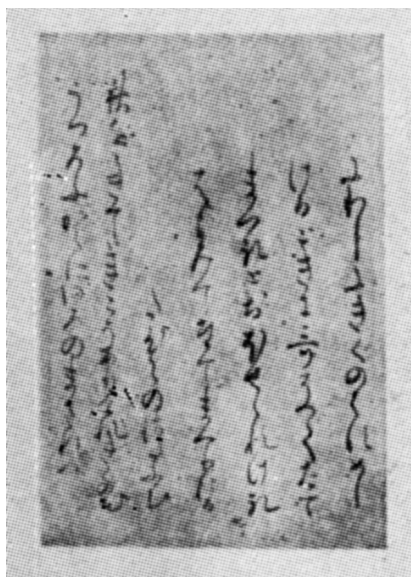


図6

けるときに哥そへてたて  
まつれとおほせられけれ  
はよみてたてまつりける  
たいらのさたふむ  
秋を、きてときこそありけれきくの花  
うつろふからにいろのまされハ

源三位頼政 古今集切 月のうた (92頁)

伝源頼政筆の「古今集切」巻四(192~194・191番)である。

伝頼政筆の「古今集切」には名物切というほどのものではなく、『古筆名葉集』の類には、「同（六半）を受ける）古今杉原」というのがあるのみである。しかし現実には伝頼政筆の「古今集切」は相当数が存在しており、『古筆学大成』は（一）から（四）までの四種類に分類してそれぞれ複数の写真掲載している。管見ではそれ以外にも、たった一枚だけのものも含めて数種類の「古今集切」が存在している。それらの中では、（一）と（四）の残存枚数が多いようである。中でも（一）が最も多く、これが伝頼政筆「古今集切」の中心になるであろう。当該断簡もまさにその（一）の断簡である。

本断簡については、『古筆学大成』は何も触れていない。『古筆切資料集成 一』には本目録に拠る翻刻がある。（図7）

さよ中<sup>と</sup>よはふけぬらし<sup>かり</sup>かねの  
きこゆるそらに月わたるミゆ

これさたの<sup>みこ</sup>の家の哥合によ  
める

おほ<sup>えのち</sup>さと

月ミれハち、にものこそかなしけ  
れ我身ひと<sup>と</sup>つの秋にハあ<sup>ら</sup>ねと

た、ミね

ひ<sup>さ</sup>かたの月のかつらもあきはなを  
もみちすれはやて<sup>りま</sup>さるらん

しらくもにはねうちかはしとふかりの  
か<sup>す</sup>さへみゆるあ<sup>き</sup>のよの月



図7

右に見る通り、全部で十二行である。この伝頼政筆「古今集切」には一面十行から十二行までのものがあり、その点で不審はないようだが、写真をつぶさに見ると、末尾の二行がその前の歌との間隔が非常に狭く、いささか不自然な感じがする。そもそもこの二行は冒頭の「さよ中と」の歌の前にあるべきもので、歌順が違っている。これを以って異本の本文と考えるのは早とちりになるだろう。末尾の二行の前の空間が狭すぎるというのは個人の感想に過ぎないかもしれないが、さらに写真を丁寧に観察すると、この狭い間隔の間に黒っぽい線のようなものが見て取れる。おそらくこの線は二枚を糊で貼り合わせた痕跡なのである。つまり、本来前にあった(前頁か裏面の末尾にあった)二行を順序を間違えて後ろに貼り合わせてしまったのだ、と考えられる。こうした例は『和漢朗詠集』の断簡にはしばしば見られる現象なのであるが、『古今集』には珍しい。なぜそんなことをしたのかは分からないと言えない。

二条為氏卿 因幡切

伝二条為氏筆「因幡切」『古今集』卷五(249~251番)の断簡。色染めの料紙に楼閣や人物等の文様を空摺にした唐紙を

用いている。本断簡でも空摺の下絵がはつきり見えている。本断簡も写真は比較的鮮明なのだが、『古筆学大成』はやはり写真の転載はせず、釈文のみを掲げている。(図8)

古今和調集卷第五秋哥下

これさたのみこの家の哥合のうた

文屋やすひて

ふくからにあきのくさ木のしほるれハ  
むへやまかせをあらしといふらん  
くさも木もいろかハれともわたつうみの  
なミのはなにそあきなかりける

あきのうたあはせしける時によめる

紀よしもち淑望

もみちせぬときハのや[ま]はふくかせの  
をとにやあきをきゝわたるらん



図8

以上で『天竺家愛蔵品入札並売立目録』に収録された古筆切関係の写真はすべてである。新出資料と呼べるものが一つもないのはいささか残念ではあるが、多少なりとも後の役に立つ点があれば幸いとすべきか。

これら以外に、元政上人の和歌懷紙、牡丹花肖柏の短冊、本阿弥光悦の和歌懷紙、同歌切などが見られるが、古筆切の範疇には入らないので割愛することとする。

(こじま・たかゆき 成城大学名誉教授)